

令和7年産 コメ通信

第11号（令和7年12月25日）

【発行】
北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話：0186-62-1835）

～管内の作柄「平年並」、総収数少ないが千粒重やや大きい～

1 気象及び生育概況

【気象経過】

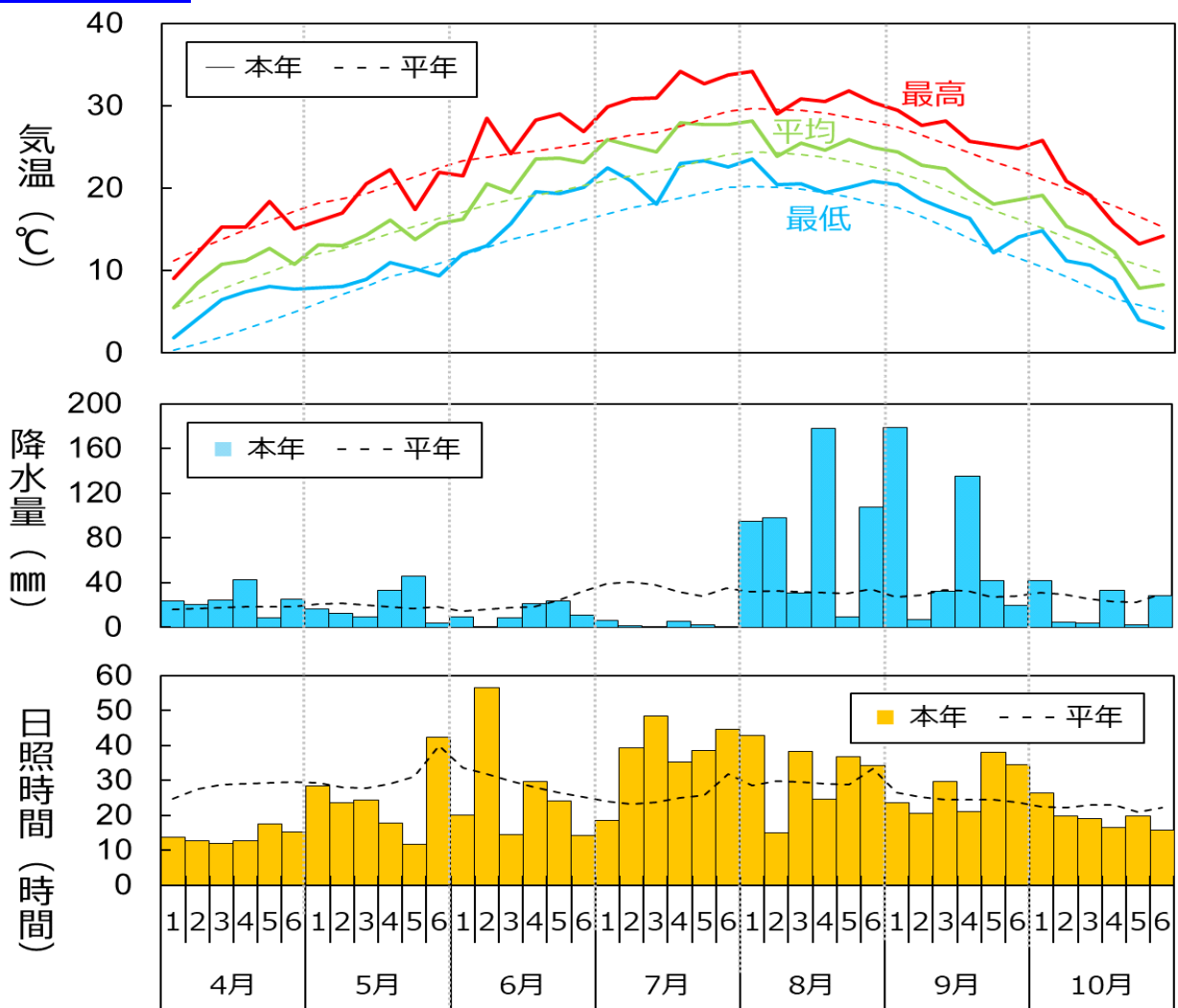


図1 半旬別の気象経過（アメダス鷹巣）

表1 4月から10月までの気象経過（アメダス鷹巣）

	平均気温 (°C)		降水量 (mm)		日照時間 (hr)	
	R 7	平年差	R 7	平年比	R 7	平年比
4月	9.9	+1.6	144	136%	84	50%
5月	14.4	+0.2	121	105%	148	80%
6月	21.1	+2.3	74	60%	214	144%
7月	26.5	+4.0	15	7%	179	103%
8月	25.5	+1.8	491	263%	166	99%
9月	21.0	+1.9	409	241%	164	114%
10月	12.8	+0.6	114	71%	126	94%

【調査結果からみた生育概況】

本年の生育（あきたこまち：9地点平均）は図2のようになりました。図1の気象経過と併せて、時期別に分けて振り返ります。

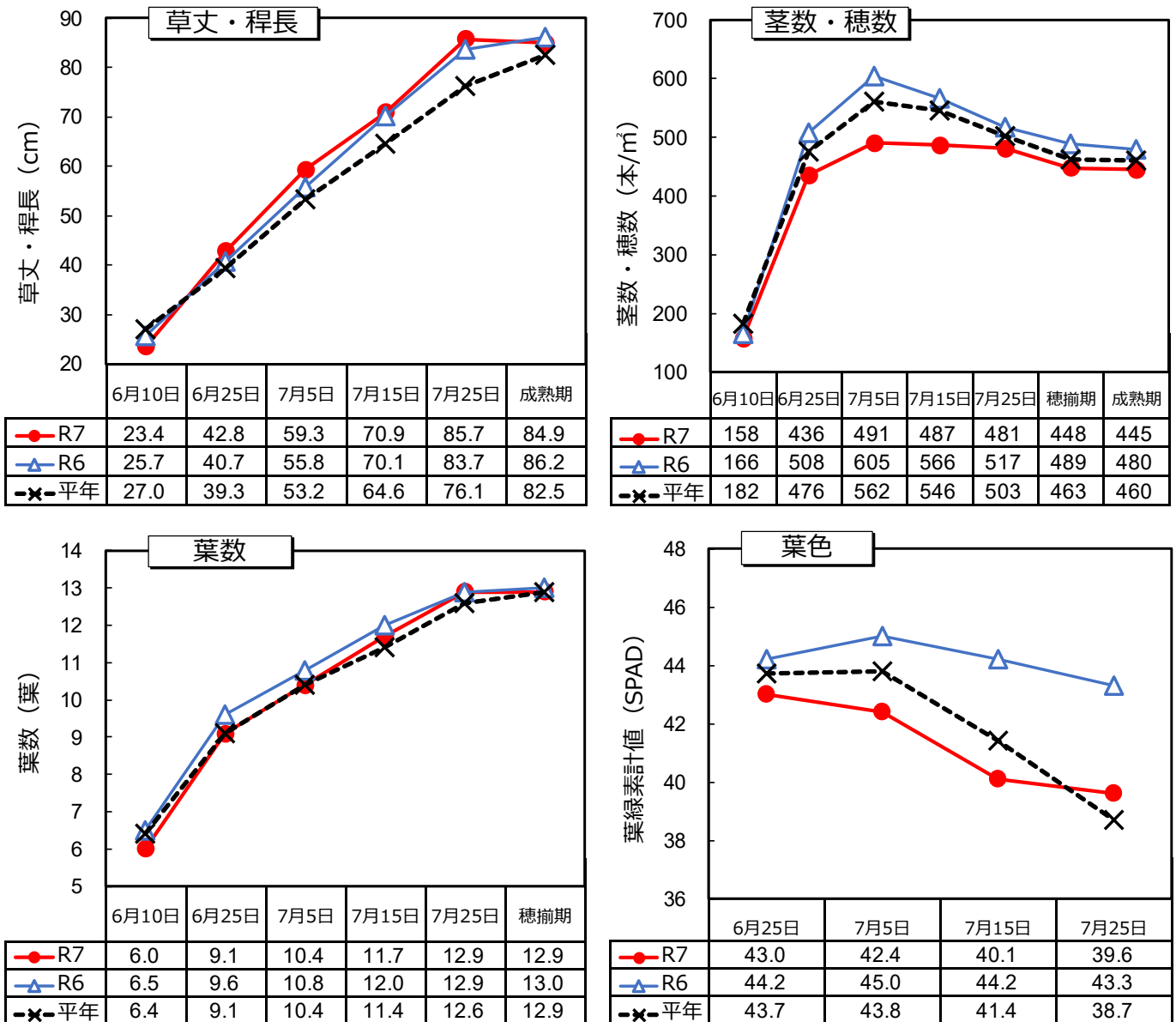


図2 定点調査結果

※平年は過去10か年の平均値を示す。
葉色は葉緑素計SPAD-502で測定した。

(1) 育苗期

○4月は平年よりも気温が高く推移しました。連続した降雨や曇天により、降水量は多く、日照時間はかなり少なくなりました。

- ・寡照によりハウス内の温度が上昇しなかったため、例年よりも高温障害や苗立枯病は少なくなりました。しかし、育苗期間をとおして日照時間が少なく推移したことから、軟弱徒長した苗が散見されました。また、育苗期後半は降雨による多湿の環境が続いた後、高温・多照によりハウス内温度が上昇した日があったため、ムレ苗や籾枯細菌病、苗もちが散見されました。
- ・管内の播種盛期は、平年よりも1日遅い4月19日でした。

(2) 田植期～活着期

○5月3～4半旬の気温は平年よりもやや高く推移したものの、5月5半旬から6月1半旬は低温となりました。降雨は期間をとおして多く、日照時間は少なくなったため、気温日較差が小さい日が多くなりました。

- ・4月～5月の天候不順で、耕起作業が遅れたことや、低温により田植えを見合わせたほ場が多かったことで、管内の田植作業の盛期は、平年よりも3日遅い5月24日でした。田植え翌日から5日間の移動平均気温は、田植盛期である5月5半旬に中苗の適温とされる14℃を下回っていたため、活着が遅れたほ場が多く見られました(図3)。
- ・6月10日の調査(表2)では、平年よりも葉数は少なく、草丈は短く、茎数はかなり少なくなりました。5月下旬以降は低温傾向で、気温日較差が小さかったため、分けつの発生が抑制されたと考えられます(図4)。また、生育抑制により、葉色が薄いほ場が多く見られました。

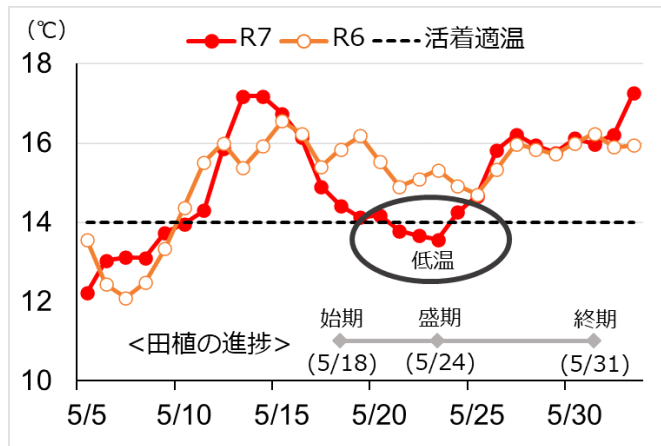


図3 田植翌日から5日間の移動平均気温

表2 定点調査結果(6月10日)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)
本年	23.5	148	5.9
平年	27.0	182	6.4
前年	25.7	166	6.5
平年比較	87%	81%	-0.5
前年比較	92%	89%	-0.6

※平年は過去10か年の平均値を示す。

(3) 分けつ期

- 6月2半旬以降の気温は高く推移しました。また、曇天日が多かったため、期間をとおして、降水量・日照時間はともに少なくなりました。
- 仙台管区气象台発表の東北北部の梅雨入りは、6月14日頃(平年差-1日)でした。
- ・6月25日の調査(表3)では、平年よりも草丈は長く、茎数は少なく、葉色はやや淡くなりました。7月5日の調査(表4)でも同様の傾向となり、草丈はかなり長く、茎数はかなり少なく、葉色はやや淡くなりました。
- ・6月2半旬以降、高温で推移したため、葉数が進展し、遅れていた生育は回復しました。しかし、寡照の影響により草丈は伸長しました。また、茎数は、気温日較差の小さい日が多かったことに加え、6月2半旬の急激な気温上昇によりワキが多く発生したことにより、分けつの発生が抑制されたため、少なくなりました。

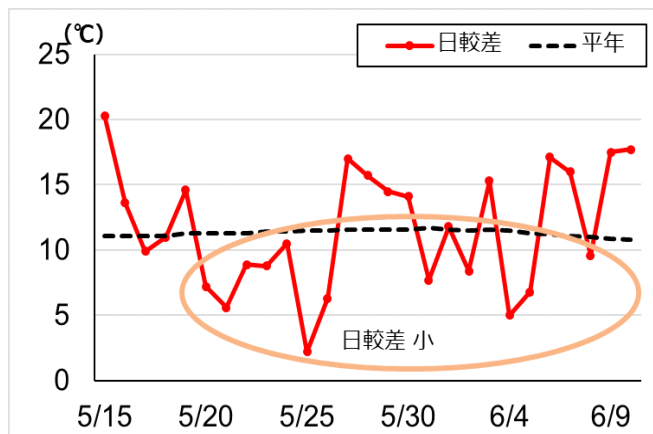


図4 田植始期以降の気温日較差

表3 定点調査結果(6月25日)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色
本年	42.8	436	9.1	43.0
平年	39.3	476	9.1	43.7
前年	40.7	508	9.6	44.2
平年比較	109%	92%	+0.0	98%
前年比較	105%	86%	-0.5	97%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

※葉色はSPAD-502で測定した。

表4 定点調査結果(7月5日)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色
本年	59.3	491	10.4	42.4
平年	53.2	562	10.4	43.8
前年	55.8	605	10.8	45.0
平年比較	111%	87%	±0.0	97%
前年比較	106%	81%	-0.4	94%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

※葉色はSPAD-502で測定した。

(4) 幼穂形成期～減数分裂期

○気温は7月2半旬以降、高く推移しました。日照時間は7月2半旬以降、かなり多く推移しました。この期間は、降雨がほとんどなかったため、7月の降水量は平年比7%とかなり少なく、干ばつ傾向となりました。

○河川等から水を汲み上げることができず、用水が不足したほ場では著しく深い亀裂が生じ、水分不足による生育停滞がみられました。また、亀裂からの漏水により、取水しても湛水できない状況がみられました。

- ・7月16日の調査(表5)では、草丈はかなり長く、茎数はかなり少なく、葉色は淡くなりました。この時点での幼穂長は平均3cmで、全ての調査地点で幼穂形成期を過ぎていました。
- ・7月25日の調査(表6)では、草丈はかなり長くなり、茎数は少なく、葉色はやや濃くなりました。この時点で、全ての定点ほ場で減数分裂期(葉耳間長±0cm)を過ぎており、走り穂が見られるほ場もありました。
- ・草丈は高温傾向により、かなり長くなりました。また、葉数の進展により生育ステージが前進したことで、幼穂形成期や減数分裂期が早まったとみられます。

表5 定点調査結果(7月16日)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色
本年	70.9	487	11.7	40.1
平年	64.6	546	11.4	41.4
前年	70.1	566	12.0	44.2
平年比較	110%	89%	+0.3	97%
前年比較	101%	86%	-0.3	91%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

※葉色はSPAD-502で測定した。

表6 定点調査結果(7月25日)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色
本年	85.7	481	12.9	39.6
平年	76.1	503	12.6	38.7
前年	83.7	517	12.9	43.3
平年比較	111%	96%	+0.3	102%
前年比較	102%	93%	±0.0	91%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

※葉色はSPAD-502で測定した。

(5) 出穂期～成熟期

○気温は最高気温が30℃を超える日が続いたため、平年より高く推移しました。また、晴天となる日が多かったため、日照時間は多くなりました。降水量は、周期的に強い降雨があり、8月、9月ともかなり多くなりました。特に、8月20日、9月2日、9月17日には記録的な大雨となり、河川等が増水したことで、一部の地域ではほ場の冠水・浸水がみられました。

○7月に干ばつの影響を強く受けたほ場では、葉枯れが散見されました。さらに、乾燥ストレスにより、稈長・穂長が著しく短くなった稲や、不稔粒がみられました。

- ・穂揃期(8月20日)の調査(表7)では、茎数が少なく推移していたため、穂数は少なくなったものの、一穂あたり着粒数が多かったことで、m²あたりの着粒数は平年よりもやや多くなりました。
- ・高温傾向で生育が早まったため、定点調査ほの出穂期は平年より3日早い7月27日、管内全体の出穂期も平年より2日早い7月30日となりました。

表7 定点調査結果(8月20日)

	穂数 (本/m ²)	葉数 (葉)	着粒数		出穂期
			(粒/穂)	(粒/m ²)	
本年	448	12.9	74.7	33,469	7/27
平年	463	12.9	71.1	32,787	7/30
前年	489	13.0	65.8	32,212	7/28
平年比較	97%	±0.0	105%	102%	-3日
前年比較	92%	-0.1	114%	104%	-1日

※平年は過去10か年の平均値を示す。

- ・高温傾向により登熟は早まり、定点調査ほの成熟期は平年より6日早い9月8日となったため、管内の刈取始期は平年より5日早い9月15日となりました。刈取開始は早かったものの、断続的な降雨により刈取ができない日が続いたため、盛期・終

期はいずれも平年より1日遅い9月30日・10月15日となりました。

- ・成熟期（9月10日）の調査（表8）では、平年と比べ稈長、穂長はともに長くなりました。穂数は少なくなったものの、無効分げつが少なかったため、有効茎歩合は平年よりも高くなりました。

表8 定点調査結果（9月10日）

	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	有効茎 歩合(%)	倒伏度 (0~5)
本年	84.9	18.1	445	86.6	0.5
平年	82.5	17.8	460	81.3	0.6
前年	86.9	18.2	480	80.1	2.5
平年比較	103%	102%	97%	+5.3	-0.1
前年比較	98%	99%	93%	+6.5	-2.0

- ・定点調査ほにおける倒伏程度は0.5（平年：0.6）と平年並になりました。稈長は長かったものの、干ばつにより地力窒素の吸収が抑制され、下位節間（第3～5節間）が伸長しなかったため、倒伏が進まなかったと考えられます（図5）。

※平年は過去10か年の平均値を示す。

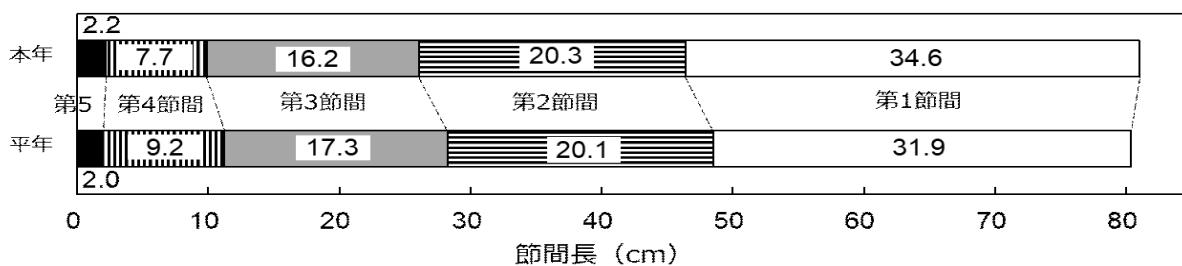


図5 節間長の比較 ※平年は過去10か年の平均値を示す。

2 収量構成要素

表9 収量調査結果

	精玄米重 (kg/10 a)	穂数 (本/m ²)	着粒数		登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
			(粒/穂)	(粒/m ²)		
本年	578	445	67.4	29,905	84.9	23.0
平年	586	460	68.4	31,314	86.5	22.6
前年	581	480	65.5	31,301	84.2	22.5
平年比較	99%	97%	99%	96%	-1.6	102%
前年比較	99%	89%	103%	96%	+0.7	102%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

精玄米重及び千粒重は1.9 mmのふるいを使用し、水分15%で換算した。

一穂あたり着粒数は平年並だったものの、平年よりも穂数が少なかったため、m²あたり着粒数は少なくなりました（表9）。また、干ばつによる稲体の早期凋落や、登熟期後半の穂いもちの蔓延が影響し、登熟歩合は平年より1.6ポイント低くなりました。しかし、千粒重が平年よりも大きくなったことで、坪刈収量（精玄米重）は578 kg/10 aと、平年並になりました。

3 米の作況及び農産物検査結果

- ・東北農政局が公表（令和7年12月12日）した令和7年産水稻の作況単収指数は、秋田が「103」、県北は「102」となりました。また、東北農政局発表の秋田県産米の1等比率は、10月末現在で92.5%となっています（前年88.6%）。
- ・管内の登録検査機関における農産物検査（令和7年9月1日～11月30日）（表10）によると、水稻うるち玄米の品位等検査結果は1等比率が88.5%と前年よりも低くなっています（前年差-3.4%）。また、2等以下の格付け理由は、多い順から①着色粒（斑点米カメムシ類等）、②形質（充実度不足）となりました（表10）。
- ・本年は高温・干ばつにより、高温・乾燥などの生理的な要因から発生するくさび米（着色粒に分類）もみられました。

表10 管内における令和7年産水稻うるち玄米の品位等検査結果

	検査数量 (kg)	1等		2等		3等		規格外	
		数量 (kg)	%	数量 (kg)	%	数量 (kg)	%	数量 (kg)	%
本年	15,843,220	14,013,654	88.5	1,574,110	9.9	184,680	1.2	70,776	0.4
前年	17,199,239	15,807,741	91.9	1,269,368	7.4	107,760	0.6	14,370	0.1

	落等数量 (kg)	整粒不足		形質 (充実度不足)		被害粒 (胴割れ等)		着色粒 (カメムシ類)		その他の要因	
		数量 (kg)	%	数量 (kg)	%	数量 (kg)	%	数量 (kg)	%	数量 (kg)	%
本年	1,829,566	66,156	3.6	661,410	36.2	72,250	3.9	986,790	53.9	42,960	2.3
前年	1,391,498	7,260	0.5	347,180	25.0	43,440	3.1	988,818	71.1	4,800	0.3

※ 11月末現在の管内水稻うるち玄米の落等数量

4 病害虫の発生状況

(1) いもち病

ア 苗いもち

- ・降雨による多湿の環境が続いた後に、高温・多照によりハウス内温度が上昇した日があったため、育苗期の後半に苗いもちの発生がみられました。

イ 葉いもち

- ・BLASTAM (アメダス鷹巣、大館、阿仁合) による葉いもち感染好適日判定の結果、管内では6月中・下旬に数回、広範囲で感染好適日が観測され、6月下旬から病斑がみられました。7月2半旬以降は気温日較差の大きい日が続き、稲体が結露したため病斑形成は進みました。8月以降には降雨が多く、感染に好適な多湿の条件が続いたため、葉いもちが拡大しました。

ウ 穂いもち

- ・葉いもちの発生がやや多かったため、多くのほ場で穂いもちの発生がみられました。防除が適期にできなかった地域では多発し、一部では株全体が枯死したほ場もみられました。

(2) ごま葉枯病

- ・7月の干ばつで早期に稲体の活力が低下したほ場では、8月上旬から病斑がみられました。その後、稲体の凋落に伴い病斑は増加し、9月上旬頃には多くのほ場で上位葉に発病がみられました(図6)が、穂枯れはみられませんでした。

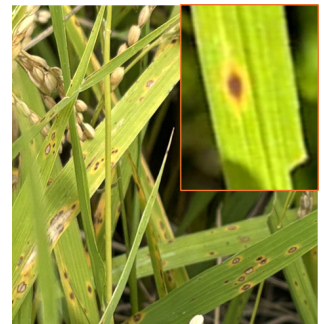


図6 ごま葉枯病病斑

(3) 紋枯病

- ・7月は高温多照となり、発生は昨年よりも少なくなりました。しかし、8月以降は高温多湿の環境が続いたため、一部のほ場では成熟期に上位葉まで病斑が進展しました。

(4) 斑点米カメムシ類

- ・出穂しているイネ科雑草やカヤツリグサ科雑草が多いほ場において、斑点米カメムシが多く確認されたため、病害虫防除所から防除対策情報が2回発表され、今年度も出穂期10日後及び24日後頃の計2回の防除が推奨されました。
- ・生育期間をとおして気温が高めに推移したことと、ノビエ等のイネ科雑草が残草したほ場が多かったこと等から、斑点米カメムシ類の活動は活発だったとみられます。これにより、水田内への斑点米カメムシ類の侵入が多くなったため、斑点米被害が多くなったとみられます。

5 作柄・品質に影響した要因

(1) 育苗期間の高温寡照により苗が軟弱傾向

- ・育苗期間は高温傾向だったものの、寡照で推移したため、ハウス内の温度が上がりづらく、草丈の伸長や葉令の進展は遅れました。また、寡照が強く影響したことで、苗は徒長し軟弱傾向となりました(図7)。
- ・苗の軟弱徒長と移植後の低温条件が重なったため、活着不良の苗が散見されました。

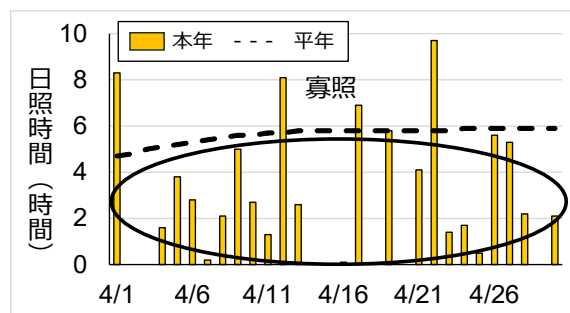


図7 4月の日照時間 (アメダス鷹巣)

(2) 田植え後の低温による活着遅れ、初期の生育抑制

- ・田植盛期である5月5半旬は、低温・日照不足が続いたため、活着が遅れました(図8)。このため、初期分げつの発生が抑制され、初期生育は緩慢に推移しました。
- ・6月～7月1半旬は、日照時間が短く、気温日較差が小さい日が多くなりました(図9)。初期分げつの発生が抑制されたことから、生育期間をとおして茎数が平年よりも少なく推移し、穂数は平年の97%と少なくなりました。

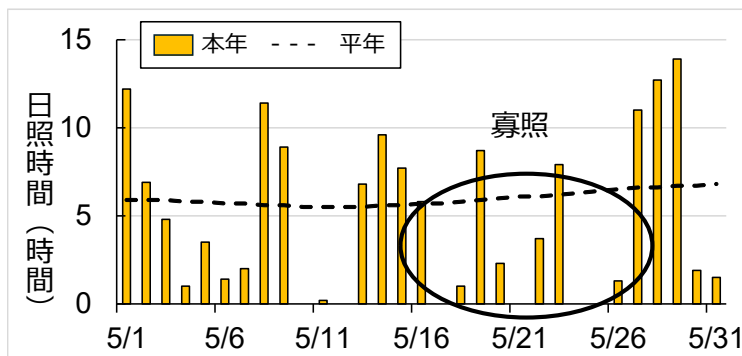


図8 5月の気温 (アメダス鷹巣)

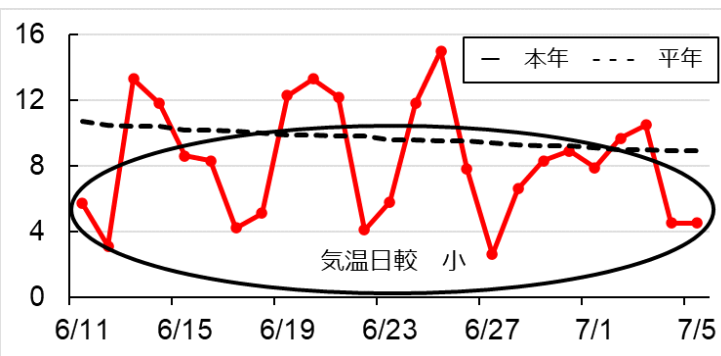


図9 分げつ期の気温日較差 (アメダス鷹巣)

(3) 干ばつによる稲体の早期栄養凋落

- ・7月の干ばつ傾向により、土壌からの窒素吸収が抑制され、稲体が消耗したため、穂揃期の葉色は平年よりも淡くなつたと考えられます(図10)。
- ・早期に稲体の活力が低下したことで、穂揃期に確保していた1穂着粒数(平年比105%)が十分に登熟できなかつたため、登熟歩合は低下したと考えられます。

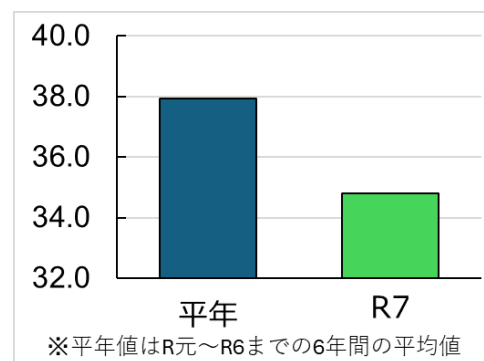


図10 穂揃い期の葉色

(4) 穂いもちの多発により登熟歩合が低下

- ・8月5日～8日の大雨以降、上位葉に葉いもちが発生しているほ場が多くみられ、8月下旬からは穂いもちの発生が拡大しました。
- ・穂いもちの発生が拡大した要因として、管内では育苗期から苗いもちの発生が確認され、葉いもちの発生量も多かったことが考えられます。
- ・登熟期間は気温が高かつたため登熟は早く進んだものの、穂いもちの感染により、穂枯れが発生したほ場も多くみられました。そのため、登熟歩合は平年よりもやや低くなりました。

(5) 登熟期間の高温・多照により粒肥大は順調、千粒重が大きい

- ・ 出穂期以降は気温が高く、日照時間はやや多く推移したため、登熟は順調に進みました。
- ・ 粒厚分布（図11）を見ると、2.0mm以上の割合は平年よりも2.5ポイント高くなり、粒肥大は良好でした。
- ・ 粒肥大が順調に進んだため、千粒重は23.0gと平年よりもやや重くなりました。

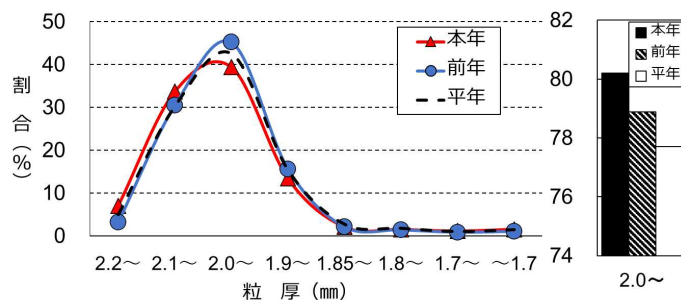


図11 粒厚分布 平年は過去10か年の平均値を示す

6 次年度に向けて

(1) 気候変動リスクを軽減する総合的な土づくり

- ・ 本年は収穫期の降雨によりほ場がぬかるみ、収穫作業に苦慮する場面が散見されました。排水不良田では、溝切りや排水溝につながる明きよの施工で表面排水を図りましょう。
- ・ 近年、耕深が浅くなる傾向にあり、気温の上昇に伴い異常還元（ワキ）の症状がみられます。そのため、耕起深15cmを確保し、水稻が根を張り養水分を吸収しやすい環境をつくりましょう。ただし、深耕によって下層のやせた土が混入したり、養分吸収量が多くなり生育過剰となる場合があるため、少しずつ耕起深を深くしていきましょう。
- ・ 定期的に土壌診断を行い、養分の過不足を確認して、必要な量の堆肥や土づくり肥料、化学肥料を施用してバランスの良い土壌養分を維持しましょう。
- ・ 特に、ケイ酸は根の活力を高めたりする効果があり、高温や日照不足等の異常気象対策にも効果的とされています。籾による持ち出し分のケイ酸を補給するためには、ケイカルで 100kg/10a目安に継続して施用することが必要です。

(2) 適期田植えと栽植密度の適正化

- ・ 低温による初期生育の遅延を避け、出穂期の早期化による高温登熟を軽減するため、あきたこまち（中苗）の場合 5月15日～20日頃を目安に田植えを行いましょう。日平均気温で稚苗 13℃以上、中苗 14℃以上（できれば日中の最高気温が 20℃以上）に実施し、最高気温 15℃以下の日は行わないようにします。
- ・ 極端な早植えや遅植えは、その後の気象条件により作柄や品質に大きく影響するため、避けます。
- ・ 近年は4月から高温多照となる年も多いため、ハウス内気温やかん水等に留意して健苗育成に努め、適期移植を行うことで、安定した初期生育を確保しましょう。
- ・ 栽植密度や植え付け本数の減少は、その後の茎数（穂数）確保に影響を与え、作柄や品質の低下にもつながります。栽植密度は 21～22 株/m²（70 株/坪）、植え付け本数は中苗で 3～4 本/株を目安に田植えを行いましょう。

(3) 水稻の生育や気象状況に応じた適切な水管理

ア 初期生育を確保する水管理の徹底

- ・ 苗は通常 4～5 日で活着しますが、気温・水温ともに高いほど活着は早くなります。活着するまでは保温効果を高めるために、水深を 4 cm 程度とします。活着が確認された後は、日照の多い日や温暖な日は浅水管理とし、水温・地温を高めて分げつの発生を促進します。

イ 適期中干しの実施

- ・目標とする茎数を確保した後、直ちに中干しを行います。期間は7～10日位、田面に亀裂が1～2cm入り足跡がつく程度とします。幼穂形成期に土壤水分が低下すると、1穂粒数の低下を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了します。また、過度の中干しは根を傷め、稲体の衰弱を招く恐れがあるため、注意しましょう。

ウ 登熟を促進する水管理

- ・出穂時期は水を多く必要とするため、出穂後10日間は湛水管理し、その後は間断かん水とします。落水時期は出穂後30日以降とし、根の機能を維持して登熟を促進します。気温が30℃以上になる場合は、用水の確保が可能であればかけ流しかん水を行います。かけ流しかん水が困難な場合は、落水期間の短い間断かん水や、午前にかん水する等、水分供給と地温の低下に努めます。また、水不足等で用水の確保が困難な場合は、溝切り跡への通水等により土壤水分を補充し、夜間の地温低下を図りましょう。

(4) 生育中期の適切な施肥管理

- ・幼穂形成期、減数分裂期の追肥は、幼穂形成期の生育・栄養診断から、その要否や施肥量を適切に判断し、実施しましょう。
- ・中干し以降、極端に葉色が低下すると、下層への根の伸長が抑制され、1穂着粒数の減少や有効茎歩合の低下を招きます。肥効調節型肥料の利用や堆肥施用による地力向上を図るとともに、栄養診断で追肥が不要と診断された場合でも追肥を検討しましょう。

(5) 病害虫の適正防除

ア いもち病

- ・本年は葉いもちの発生が多く、穂いもちの発生も多くなりました。本田におけるいもち病の発病の主因は育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みのほか、乾燥状態で冬を越した稲わら、籾殻等の伝染源からの感染となります。

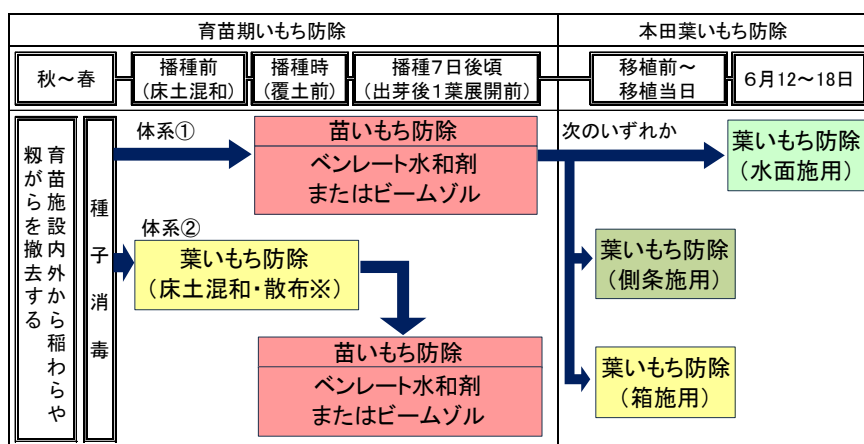


図12 いもち病防除体系

ります。稲わら、籾殻を育苗施設内から撤去し、適正かつ効果的な種子消毒、育苗期のいもち病防除で本田への持ち込みを最小限に食い止めましょう。

【防除のポイント】

- ①稲わら、籾殻を撤去し、作業環境の衛生管理を徹底しましょう。
- ②育苗期防除（ベンレート水和剤やビームゾル）で本田への持ち込みを回避しましょう。箱施用剤による本田の葉いもち防除は、使用時期や使用方法を守り、防除を徹底してください。高密度播種苗の場合は使用料に注意してください。
- ③余り苗は強力な発生源になるため、泥の中に埋める等して早期に処分しましょう。


イ 紋枯病

- ・本年は一部のほ場で病斑の上位葉鞘への進展がみられました。
- ・穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤を株元に到達するよう散布します。本年多発したほ場では、育苗箱施用剤やモンガリット粒剤、リンバー粒剤等の水面施用剤の使用も検討してください。

ウ ごま葉枯病

- ・砂質で秋落ちしやすい水田で、生育後期に肥切れした場合は発生が助長されるため、地力を維持する土づくり対策（6（1））をします。
- ・砂質で秋落ちしやすいほ場では、以下を参考に薬剤防除を行います。

砂質で、秋落ちが認められ、CECが15meq/100g未満 または 過去に発生があるほ場	砂質かつCECの低いほ場で 「過去に発生がある場合」 または 「幼穂形成期～穂ばらみ期に発生がみられた場合」	出穂期と穂揃期
		ブラシフロアブルまたは ノンプラスフロアブル 1,000倍 100～150L/10a


 穂枯れ（ごま葉枯病菌）に登録がある育苗箱施用剤※を使用

※エバーゴルフオルテ箱粒剤、箱大臣、ルーチンパンチ等

図13 ごま葉枯病薬剤防除

エ 斑点米カメムシ類

- ・主要種となっているアカスジカスミカメは、イネ科やカヤツリグサ科雑草で増殖するため、本田内及び畦畔にカメムシ類が増殖しない環境を作ることが重要です。
- ・ここ数年、雑草が目立つほ場が多く見られます。除草剤の適期・適正な使用により、増殖源となる雑草を効果的に除去しましょう。その上で、殺虫剤による本田防除を徹底し、斑点米被害を回避しましょう。

◇農道・畦畔の草刈り（図14）

- ・6月上旬から出穂期10～15日前までに数回行う。
- ・8月は、出穂期10日後頃の薬剤散布後7日以内までに草刈りを行い、その後は収穫2週間前まで草刈りは行わない。

◇本田内雑草防除（6（6）雑草防除の項参照）

◇薬剤防除（図14）

- ・出穂期10日後頃の防除（スタークルまたはアルバリン剤）を徹底する。
- ・牧草地や休耕田等の発生源と隣接している場合や、水田内にノビエやカヤツリグサ科雑草が発生している場合は、出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を実施する。薬剤抵抗性の発生防止のため2回目はキラップ剤を使用する。

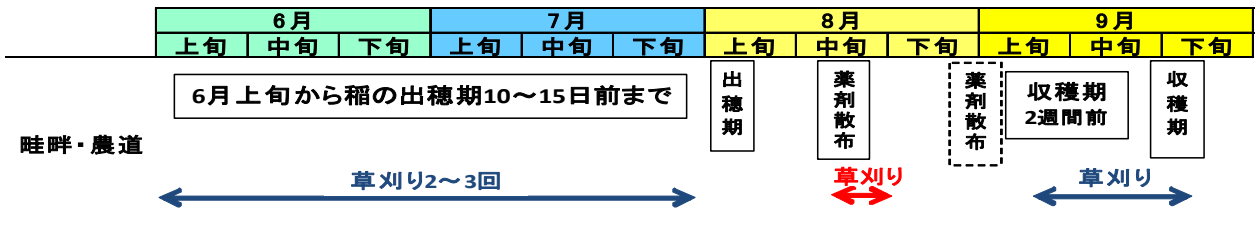


図14 斑点米カメムシの薬剤防除と草刈り期間

(6) 雑草防除

- ・本田内にノビエやホタルイ、オモダカ等の雑草が目立つほ場が近年増加しています。発生始期の雑草は非常に小さく、畦畔から見えるようになった頃には除草剤の散布適期を逃していることが多いです。田面が露出すると除草剤の効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水するようにしましょう。

【除草効果を高めるポイント】

- ① 畦畔補修等の漏水対策をする。
 - ② 田面の均平を図り十分な水深を確保する。
 - ③ 代かきから除草剤散布まで日数を空けすぎない。
- 注：散布後に田面が露出すると除草効果が低下します。

【高密度播種苗移植ほ場における一発剤田植え同時処理の留意点】

高密度播種苗は中苗と比較すると軟弱徒長気味であり、一発剤の田植え同時処理による生育抑制の影響を受けやすい傾向にあります。そのため、本年のように移植後の気象条件が不良な年では、初期生育が抑制され穂数・収量に影響する恐れがあります。高密度播種苗の田植え同時処理には初期剤を使用し、その後、一発剤を処理する体系散布により、雑草防除と初期生育の確保を両立しましょう。